

浄土真宗と念仏者の責務

基幹運動は宗祖親鸞聖人があきらかにしてくださった念仏の「真実の精神」をくみとっていないのではないかという反省から出発しなければならぬことを、確認してくださいませ。

これは、私たちが、「形ばかりの僧侶」「名ばかりの門徒」になっているのではないかという前門主（勝如上人）の指摘に通じると思います。

私が「信心の行者」となり「開かれた宗門」、その生活は、如来の本願を究極のよりどころと仰ぐとともに、罪悪生死の凡夫であることに目覚めた、喜びと慚愧はんざいの生活であります。さらに、如来の大悲につつまれて、人間相互の信頼を確立した御同朋御同行の生活でもあります。

私が、このように「同朋教団」を理解致しますのは、「私とは、どのような存在か」というところから出発する真宗理解によるものです。すこしまわりくどくなりますが、お許しください。

私が今ここに生きているのは、という考えることもできないほど昔から次々と受け継がれてきた「いのち」を親を通して恵まれたということ
です。

すなわち私は量はかることのできない長い長い寿命の歴史の中で「いのち」を恵まれ、今ここに生きているのです。

また、私が今ここに生きているのは、多くの人やものの「はたらき」（光明）のお陰を蒙むかっているからです。ありとあらゆるものの「はたら

き」(光明)の恩恵の中で、私は生かされているのです。世界中の、いや、
広大無碍むげの全宇宙のすべての人やものにささえられて、私は今ここに生
きているのです。私の生命をささえてくださいる人やものの「はたらき」
を、私の「いのち」をはぐくんできてくださいる「光明」と仰ぐとき、私の「い
のち」は、文字通り、量はかることのできない「光明」にはぐくまれて生き
ているのです。

ですから、私が今ここに生きているのは、無量寿の「いのち」を頂き、
無量の「光明」にはぐくまれて生きているということにほかなりません。

私たちは気づくと気づくまいとにかかわらず、すべて、無量寿・無量
光というア(無(ミダ)量)の世界の中で、お互いにお互いの「いのち」
をささあつて、私たちは生きているのです。ですから、私以外の人やも
のも、厳密に言えば、私の「いのち」の一部なのです。

そこには他人や、他のものはありません。すべてが私なのです。すべ
てが一体となって一つ如くに生きているのです。

どちらが上で、どちらが下ということもなく、それぞれが自らの「い
のち」を精いっぱい生きることによって、お互いに「いのち」を支え合
っている一如平等の世界なのです。

このように、私たちは、本来、一如平等のアミダの世界に生かされて生
きているのです。他人も、敵も、別人もいません。

一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり

（「歎異抄」）

という、本当に親しいつながらりの中で生きているのです。

ところが、私たちは、本来、アミダ（無量寿・無量光）という一味平等の世界の中で生かされて生きていながら、アミダの世界を見失って自分中心の小さな「我」の世界をつくり、その中にこもり、身内、他人、味方・敵、とわけへだてして生きています。

我と他、彼と此と、文字通り「我他彼此^{がたびし}」した中で生き、他と争い、彼と此を差別して他を苦しめ傷つけ、自らも苦しみ傷ついて生きています。

このように、一味平等のアミダの世界を見失い、自らの小さな「我」の世界だけがすべてのように思いあやまって、自己すら見失っているあり方が、迷いであり、無明（愚痴・無知）です。

無明の深さ、迷いの深さは、その人の殻の厚薄^{はくはく}に比例します。一番迷いの深い人は、**自分だけよかつたらという生き方をしている人**です。次は「二人のために世界があるの」と、二人だけの世界に閉じこもり、他に一切が眼中にない人でしょう。

さらに家族だけ、親戚だけでも手をとって・・・となり、郷土愛、愛国心と広がるでしょう。自分一人だけという世界からは余程広がりましたが、まだ、他をわけへだてする垣根が残っています。

顔の色、話す言葉は違っても、同じ人間同士、一つになって生きていこうという人類愛の世界へと広がらなくてはなりません。

いや、人間だけが一つになったらいいというのではありません。現に、私たちが生きているのは、人間の力ではありません。前述のように、私が今ここに生きているのは、全宇宙のすべてのもののお陰なのです。

人間だけが仲よくし、他のものを傷つけていいというならば、それはまだ**迷いの中**なのです。

十方衆生じゅうじゅうしゅうじょう（あらゆる世界の生きとし生きるもの）が一つになって生きる世界こそ、アミダの世界なのです。

アミダの世界の中に生かされ、生きていながら、アミダの世界を見失い、アミダの世界に背を向けて、無明の世界をさまよい歩き、自らの「いのち」を傷つけて呻吟うんげんしている私たちを、なんとかアミダの世界に帰してやりたいと、アミダという一如平等いちにたうびんどうの世界から私のところに摂取不捨と目覚めを促す「はたらき」が声となり姿となって来て下さるのが、阿弥陀如来です。

「小さな殻に閉じこもっている自らのあり方に気づき、広いアミダの世界にめざめよ」と、私をゆさぶりに来て下さる喚び声よびこゑが「南無阿弥陀仏」なのです。そして「南無阿弥陀仏」を姿にしたのが、阿弥陀如来の姿です。

この「南無阿弥陀仏」の喚び声よびこゑを聞き、阿弥陀如来のお姿に遇って、ア

ミダの世界に目覚めるとき、私たちは自らの小さな「我」の殻に閉じこもっている間違っただけに気づきます。

小さな「我」の世界に住んで、他の人を敵視したり、差別してきた自らの間違いに気づくのです。

すなわち、あいつは敵だ、仇だ、いや、あの人はどこそこの生まれだとほかの人を敵視したり、差別してきたあやまりに気づくのです。

アミダの世界にめざめた時、敵だ、仇だ、あの人はといった人にも生かされている自分の「いのち」に目覚め（信）るのです。

敵も、仇も、差別もない、みんな私の「いのち」をささえてくださっている人たちであったことに目覚めるのです。

そこには敵も、仇も、差別もないのです。みんな私の「いのち」をささえてくださる、文字通り私の「いのち」そのものなのです。他人はいないので。みんな私たちなのです。

親鸞聖人は、「われら」の言葉で、このことをあきらかにしてくださいませ。

基幹運動・同朋教団の意味がご理解いただけただけでしょうか

また、親鸞聖人は「お釈迦さまは、こういわれていますよ。お経にはこう書いてありますよ」と、というような答え方はなさらなかったのです。

「親鸞におきては」「この親鸞は、こう受けとめているのです」と、自信を通して語られたのです。

偉い人がこう言われているから、こう思いなさい、というような話し方ではないのです。私はこの道をあゆむと、自己の人生をかたられたのです。

そして、決してこう思いなさいと、押しつけはされませんでした。

一人一人の人生ですから自分の道は結局自分なのです。自分の人生をよくよく考えて大切にしてください。

私はよき師法然聖人のお導きによって、念仏の道を選んだのです。この道をあゆむ私は、どのようなことになっても後悔ありません。

あなた方はあなた方で、本当に後悔のない道を選びなさい。自分の人生です。各自が判断するしかありません。と言いきられたのです。

藤田徹文

著書「今・真宗教団に
新しい風を」より